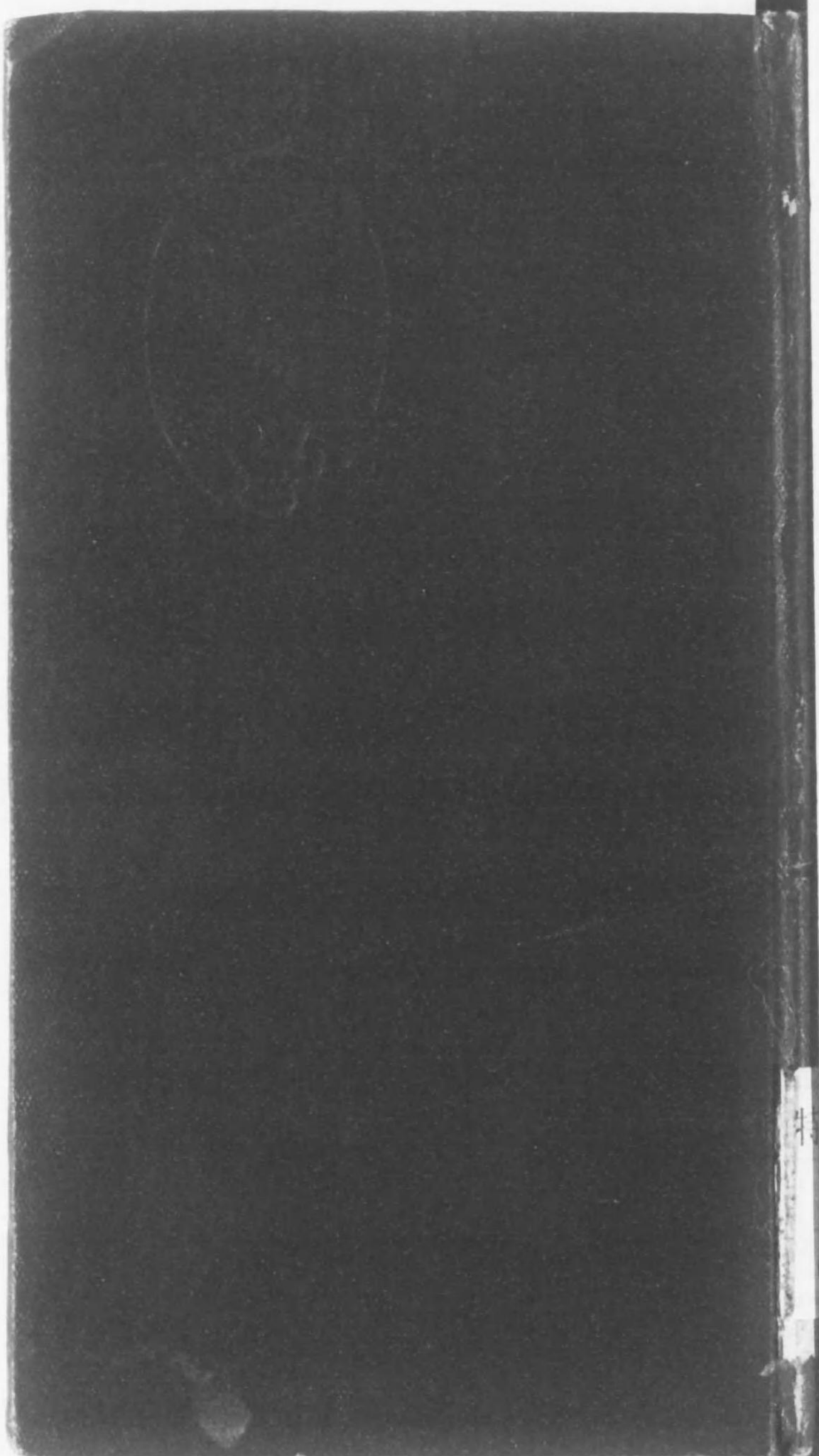
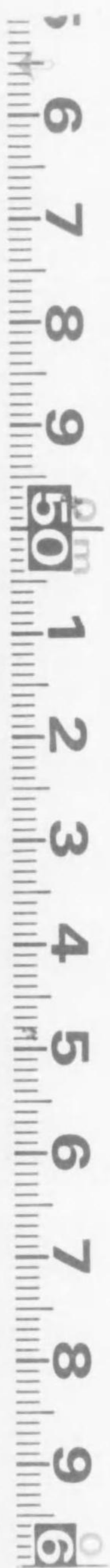


始



特 264
608

五分間演說辭典

其一

緒

論

文明の社會は言論の時代である。されば吾人が社會生活を營んで

行く上に於ては、是非とも自己の思想と感情とを遺憾なく他に發表
する手段を研究して置かねばならぬのである。自己の思ふ事を他に



發表する事の出來ぬ者は啞者である。又啞者でなくとも、自己の思ふ事を公衆の前に出て云ひない人がある。手近い例を擧ぐれば、茲に二三十人の會合があるとすると何か其の會合に於て協議する事があると假定して、其處に列した大半以上の人は、必ず「諸君の宜しいやうに」と云ふ事を云つて、或少數の人の意見に一任して仕舞ふ。然るに其の少數の人の意見に依つて決定した事項に就て、必ず後日になつて、二三人も集れば、「私は彼の時に斯う思つて居たのでしたが」、「私は實に大反對だつたのでしたが」、「私には私の考へがあつたのでしたが」と云ふやうな事を聽くのである。斯く各自に

相當の意見を有して居つたならば、何故發表をしなかつたのであらう。何故自分の思ふ事を遺憾なく述べなかつたのであらう。これ即ち自己の思想と、感情とを他に發表する手段を知らぬからである。自己の思想意見を發表せざるが爲めに一面に於て有形上、無形上に於て非常な損害を來す場合も多い事は、讀者諸氏の能く熟知せらるゝ事實が世間には多いであらう。故に吾人が社會と云ふ一の大なる團體の一人として生活して行く上に於ては何うしても自己の思想感情を他に遺憾なく發表する手段を研究し、之れを巧みに應用する事の出來るやうに修練して置かねがならぬのである。

(二) 饒舌と雄辯の別

世間には座談に巧みな人がある。種々の話題を作つて對手をして興味中に彷徨せしめ、何時も對話時の主人公となつて居る。「あの人はなか／＼話が上手だ」「あの人の話は面白い」と云ふ評語を下される。然るに斯く座談に長じて居る人も、公衆に向つて自己の思想感情を發表する事に於ては、甚だ拙劣、或は殆んど發表する事の出來ない人がある。是れ即ち公衆に向つて思想感情を發表する手段を會得せざるに依るのである。

自己の思想感情を他に發表すると云つてもそれは饒舌を意味する

のではない。何の纏りもない、何の統一もない、何の根底もない、何の感動も與へない、何の價值もないそれを云ふのでない。統一せる思想、根底のある思想、尊き價值のある言論を、燃ゆるが如き熱情を以て聽者に傳へ、而して偉大なる感動を與へると云ふのでなければ、たゞ徒らに言葉を發したと云ふに止つて了ふのである。

(二) 意思を自由に云ふ能力

故佐々博士は斯う云ふ事を云つて居る。「今は立憲政體の世の中である、其立憲政體は、自分の考へを忌憚なく言ひ現はす、十分有効に言ひ現はし得ると云ふ假定の下に出來上るのである。維新前の

やうな時代であると、理論より實行して云ふ主義で、詰り此方が正しいか、向ふが正しいか、何うも旨く判断が出来ぬ場合は、刀を抜いて決闘をする、さうして正邪を決める。又主人を諫めるのも、切腹して諫めるのであつた。所が今日は、裁判所へ出ても、國家の財政を論ずるのでも、何でも皆文章と言論とであつて、最早や刀を抜いてやるべき時代でない。小にしては村會から、大にしては帝國議會に至るまで、自分の意思を自由に言ひ現はす能力がなければ、立憲政體と云ふものは成り立たぬのである。昔の侍は、擊劍を知り、又柔道を知らなければならぬのであつたが、今の紳士は、自分で自

分の思想を口で言ひ現はし、文章で書き得る人でなくてはならぬ」と云つて居るが、實に今日は言論の時代である。自己の思ふ事を云ひ得ざる人は、處世上に於ても敗者の地位に立たねばならぬ。故に何うしても辯論修練の必要は吾人の急務である。

(三) 口と文章

又自己の思想、感情を他人に傳へるには、口で言ふ方法と字で書く方法との兩者がある。而して口で云ふ方は即ち演説であつて、字で書く方は文章である。演説にも政治演説あり、學術講演、宗教演説等があり、文章の方は式辭、祝辭、弔辭等がある。併し此の文章

の方は多くの場合に於て朗讀するのであるから、演説の方法を一通り心得て置かねば、其の音聲、態度等に於て缺くる所がある事になる。故に大體に於て政治演説をする場合も、開業祝の祝辭を朗讀するにも、根本に於いて自分の思想と感情とを遺憾なく他に發表傳達するの手段を會得して置かねばならぬ。以下雄辯界諸大家の經驗を主として編述する事とする。

其二 舌の權威

(一) 筆と舌との兩刀

諸君！ 近頃はブシコメトリ即ち人間的性能の測量と云ふ事が漸く行はれ、内外諸大學概ね實驗室を立て、頻りに研究調査を怠らない様である。ついては自分は一つ舌の力といふものを測つて貰ひたいと思つて居る。

凡そ天地間物理界には素より色々のエネルギー即ち力が行はれて居るが、人間社會には又別に種々の力がある。例へば金力、腕力、腕力、兵力、乃至色力など其重なるものである。色力と謂ふのは女色、古より早く城を傾け國を傾けるとか、さては女の髪の毛の先を以て作りたる繩には大象も繋がるべしなど云へば、今更云ふ迄もないこ

とながら、然も後世に及んで層一層甚しきものあるは必ずしもネル
ソン將軍の事など援くは及ぶまい。然り而して此等の諸力以外に又
別に筆の力、舌の力のある事を忘れてはならぬ。色力は勿論金力と
権力も、將た又腕力も兵力も往々私慾を逞しく獸性を満足せしめん
ために濫用せらるゝ様だが、筆力、舌力は元來精神の自由發動で頗
る高尚のものである。語を變じて云へば、一國文野に由つて分かる
ゝ兆候は、筆と舌と兩力の發達如何に在りと見てよからう、近代人
が特に言論の自由を尊重する所以は其處にある。

(二) 言論の自由

西洋に於ても昔の教訓には兎角に舌を束縛する傾が多かつた。

Silence is wise といふ諺は各國にある様だ、之れを直譯すると「沈
黙は賢なり」とでも仕やう。併し實はこんな場合の *Wise* は必らず
しも賢明といふ程ではない。寧ろ利口といふ迄で、*Silence is wise* は
やがて「黙つて居るのが利口だ」と云ふに外あるまい。明哲身を保
つなど謂へば、一身の安全といふ上から打算すれば、言ひたい事を
も言はぬが利口であらう。然かもそれは卑怯じや、折角天賦の自由
を空しく束ねて行使しないのは偶々靈能の乏しいことを證明する。
「物言はば唇寒し」とか「一たび口にすれば驕馬も及ばず」など兎

角用心深きことを先きとするは、恐らく封建時代人民自由の缺乏したりし遺風であらう。我が國には昔より「人を見たら泥棒と思へ」といふ教訓あり、誠に恥かしい極じや、武斷壓制の世、身體、財産並に言論の自由久しく承認せられざりし適證は歴然として、今猶は遺風の存する鮮少ならずといひたい。

自分の座右には夙に伊東仁齋の語を其の子東涯の書きたるものが掲げてある。それは「徳は感化の本、言は争辯の基云々」といふのじや。自分等産れて兎角多辯なるものには藥であらうと思ふ。併し只だ一概に徳は感化の本じや、言は争ひの基ちやと云つて、辯論を

排斥し去つては、眞に文明開化の進歩は望まれなからう。曾て大阪天王寺に開催中の明治記念博覽會を參觀し、偶々勝海舟と西郷南洲の兩雄が然諾を重んずることに由つて、何の雜作もなく道に江戸の大城を無事に明渡した事を繪に書いたのを見て深く感じた。是れは徳の力、人物の力と謂つて好からう。然かもそれと同時に又先年海外再遊の折、白耳義のブリュッセル市の大裁判所に於て正面先づデモステネスとシセロの兩像並び立てるを仰ぎて無限の思があつたことをも回想せざる得なかつた。

(三) 偉大なる舌の力

借問す誰か舌に偉大の力なしと言ふぞ、釋尊一代五十年、所謂金口の說法は是れ舌の力でないか。基督の教訓はどうだ、日蓮上人辻說法はどうだ。蓮如上人北國の化導はどうだ。特に弘法大師が清涼殿上に於て長くも主上を始め奉り月郷雲客の悉くから拜謝を受けたのは何の爲めた。皆是れ舌の力の偉大なることを證して餘あるではないか。

勿論釋尊も大法を迦葉に附屬し、自ら只だ拈華微笑するのみで禪宗を肇めたとも言はれるし、大日如來は法身其儘で說法せられて居るとも言はれるが、それは神秘不思議である。人智の上の沙汰とし

ては、如何に微妙な處も舌を藉らなければ發揮することが出来ない筆も固より力はあらうが、或は舌に及ばぬかぬ知れない。

(四) 舌は智的機關

之について思ふ事は、人間の心を智情意に三分するは既に陳腐の說であるが、暫く這の舊套を襲うて言ふとすると、智の發表機關は主として舌である、理論の機關である。而して眼は乃ち情と意との道具である、一瞥の秋波は情緒濃艶に、又炯々たる眼光は意力徹底するものがある。信仰は其處にあらう。多辯は、畢竟知中樞の活動が旺盛なることを示して餘ありと見られる。演說、說法などの場合

は舌と眼とが兼備したならばそれこそ鬼に金棒だらう。釋迦も慈眼は金口と相待つて非常に力があつたと想はれる。韓非子が遊説の難きを説いて困んで居るのは眼の研究を疎にした譏を免れまい。否更に深く論じて行くと舌は勿論眼も亦末である。眞に權威あるものご成らんとせば、根底を培養することが必要だ、所謂根底は畢竟人格で、舌の力も此の根底が固くなかつたならば只の力で權威とは行きかねやう。併し舌が元來智的機關であり、理論の機關であることは忘れてはならぬ。

舌は左様智的機關である所より、辭令に巧みな者は自ら形式に流

れる弊がある。西洋從來の雄辯術などいふものも色々細かい規則など設けて却つて拘泥の譏を免れず、活氣に乏しい様に想はれる。今や平民主義流行し、群衆の勢力漸く滔天せんとする様になつては總べて何事も形式的の事は排斥せられる様であり、従つて又英國なごでも昔の様に堂々たる大雄辯は議院の内外を問はず、聞くこと甚だ罕なりと。近着の新聞紙に見えて居た、乃ち雄辯術は漸く一變せざるべからざる運に向つて來たのだ。若し今後群衆的平民に多大の感化を及ぼさんと思ふならば、舌は智的よりも寧ろ情的にするは眞言宗の所謂三密加持を實用するに由るが捷徑であらう。弘法大師清

涼殿上の奇蹟は全く此に因るものと想はれる。併し舌は元來智的機關であり、理論の機關であることを忘れてはならぬ。

何はともあれ、舌の權威を輕蔑する國には思想の進歩は望み難い。舌は可成自由に動かして十分思想を發揚させねばならぬ。政府の壓制は勿論悪いが、群衆の盲目的壓迫も亦決して文明進歩の爲めにはならぬ、それと同時に舌を動かすものと亦常に流暢に駁辯を弄することをなさず、深く修養して十分權威あるものとなり、當代は暫く措くも百年千年の後に亘つて多大の影響を及ぼすことを心掛けねばならぬ。苟くも自由獨立の身にして、而かも口中三寸の舌ありなが

ら、世俗に媚び權勢に阿りて、所謂巧言令色をなす如きは舌の權威を瀆すこと甚だしい。死後閻魔王廳の裁判を待たず、何とかして舌の力を實驗測定したら面白くはあるまいか。筆の方の事は又それから推して自ら分からうではないか。(文學博士谷本富)

其二 雄辯修練の心得

(一) 辯論の能力

總て需要があれば、供給が起るのは天地の道理と人間社會の常態である。其例として辯論のことを云へば、四十餘年以來燦然たる文

華を開いた東洋の文明に、今代に迄傳つて尊重すべき種々のものがある。其一として不朽の文章があるが、何故か雄辯の不朽なるものは是に伴はない。由來文章も辯論も社會の自由に伴ふが、特に辯論は自由と並行するものである。文章は封じて君主に捧げ服友に賜るから、國事に關する文章も相當に活用の餘地がある。是に反して辯論は、多數の人に對して公開の場所に私用するものであるから、政治に於ては平民的、社會的に於ては自由の國でなければ其用が乏しい、従つて自由ならざる國には發達の機會が尠い、是が東洋に雄辯の不朽のものが無い理由であらう。併し支那の歴史中、小區別の國

が並立して國際競争の激しい時代には、民衆に對する雄辯は見えないが、外交的雄辯の用があつた。此時代には辯論を尊ぶの風もあり、辯論の能力を有する人も出た。論語に文學政治を並べて言論の能を宰我、子貢の二人に孔子が許したと云ふことが見える。又子産が外交家として辭令に巧みなる人と云はれて居るが、是も辯論の能力を認めたと例であらう、降つて戦時の時代に會參、張儀は世に知られた。辯論家であつた西洋に於ても古くは希臘羅馬に幾多の雄辯家が現はれたが、其後は雄辯家が政治界に乏しくして、教壇の上に現はれた。現代に於ては早く英國に雄辯家が出て、其風が米國に行はれ

佛國には革命前後から雄辯家が現はれたのは皆、時代に應じたものである。我日本にも近事雄辯を尊ぶの風が漸く起つたから、是から其能力を現はすの時代に入るのが自然の順序と思ふ。

(二) 雄辯に必要な修養と其實例

雄辯に必要な種々の修養もあらうが、要するに自家の主張を述べて、他の同意を求むる利器であるから先づ自信がなければならぬ自ら信せざることを言語の上に修飾しても人を動かす力が缺けて居るから、雄辯の基礎がない。主語を修むることも必要であり、材料の豊富も必要であるが、根源は理に依つて勝ち、熱に依つて行らぬ

ばならぬ。譯して云へば自信である自信があれば勇氣も生じ熱情もある。人を感動せしめて我に同意させることも是から生ずる。易に「修めて以て其誠を立つる」と云ふ句があるが、是は雄辯の爲めに云ふた語ではないが、内に誠を有して修めたる辭で、外に現はす意味となるから雄辯の説明として利用することが出来る。其實例として彼の有名な歴史上の事實を挙げやう。

世界の歴史上にも知られて居り、米國史を讀むものは誰も必ず知つて居る、千八百六十三年米國のペンシルヴァニア洲ゲツチスボルグに激戦があつた。是は南軍の大將リートと北軍の飛將ミットとの

間に戦はれた戦で、南北戦争中尤も大切なる戦争である。此戦に依つて南北の勝敗が殆んど決した、戦終つた後そこに戦死者を葬つて追悼の大集會があつたとき、大統領リンコルン及びエドワード、エドレット（學者としてはハーバードの教授、次で總長となり、政治家としては代議士となり、在英公使となり、マザチユセツチ洲の知事を経て國務卿となつた人である）との二人が主なる演説者であつた。リンコルンは大激戦の後非常に繁劇で演説の準備をする暇もなく、汽車の中で秘書官から鉛筆を借りて手帖に數行のノートを作つた丈で、忽ちに其場所に着いた。エドレットは先に一時間半に亘る

演説をした。此人は當時有名なる政治家、演説家で、曾てはグリーンキ語の講座を持つた博士である。米國の歴史に通曉した人であるから、其演説の巧妙なることは數萬の聽衆をしていたく感服せしめ喝采は天地を動かした。此演説は後代に迄遺つて其演説集に載つて居る程上出来であつた。リンコルンは次で壇に立つた。其演説は五分鐘程の短いものであつた、聽衆は静まり返つて一人の反響もなかつた、リンコルンは自ら大に失敗したと思つて控所に歸つたがエドレットは是を激賞して、貴下の御演説は實に崇高絶妙で、自分の一時間半の演説は殆んど云ふに足らぬ、と挨拶した。リンコルンは意外

に思つて是は自分を慰める爲の言葉だと思つて居た。

所が一日を隔て、リンコルンは大統領の官舎に終日事務を採つて疲れたから、外氣を吸はふと夕方から散歩に出掛けた。薄暗りの時刻に向ふから馳せ来る青年がリンコルンに突き當つて、非常に激して居ると見えてリンコルンを罵つた。リンコルンは靜かに何の爲めに急ぐかと聞いたら、此青年は、實に今私の兄が傷を蒙つて死に頻して陸軍の天幕に收容せられて居るが、死ぬ前に遺言を認めたいから辯護士を呼んで呉れと頼まれて急ぐ途中であると語つた。慈愛深きリンコルンは其れは痛ましいことだが、私も辯護士の免許を持つ

て居るから、其證書を作る助をしやうと打ち連れ立つて天幕に行つた。此の負傷者は南軍の士官であつた、請に應じて證書を作つてやつたら非常に感謝して「是れで安心して死ぬことが出来ます、貴下は私の信友である」と握手した。リンコルンは尙ほ立ち去り兼ねて死に垂々とせる負傷者を慰めて、暫時話をして居たら、彼の青年士官は「余は神聖なる南軍の主張を貫かんが爲めに従軍した洲權を壓倒せんとする氣風のリンコルンと云ふ男は、政治上の敵であり極めて憎むべきものと思つて居た。是を助くる北軍を敵として戦ふが今日まで憎むべき敵と思ふて居たリンコルンは決して悪人でないこ

とを知つた。今日發行の新聞を讀んで、リンコルンのケツチスボルグの演説を見たが、彼は全合衆國の統一を熱烈に希望して國民の福利を信する所の主張の爲に盡力して南軍と争ふたことの主意が明白に現はれて居る。北軍と南軍との主張は異なるがリンコルンは其確信する所の方針に依つて盡力する其精神は明白に理解された、彼の男は決して悪い人でない。自分も又一點の怨を止めない」と語り終つて姑くして息絶へた。此青年士官は目前に遺言狀を調製した人のリンコルンたることを知らずに世を去つた。此事あつて後數日を隔て合衆國民全體はリンコルンの演説を傳へ聞き又は讀過して此演説が

非常なる變化を人心に與ふるに至つた。今日も尙ほリンコルン一代の名演説として、其全部が傳はつて居る。

(三) 雄辯の極致

アメリカ人が善く口にする彼の有名なる「人民の政府」「人民の爲の政府」「人民に依るの政府」なる句は此演説の終りの辭である。歴史家は此演説をアメリカ文字中不朽のものとして居る、修辭の上に於ても純粹洗鍊のものとして居る、何んぞ知らん是を述べたる演説者其人は失敗の演説だと思ふて居た、時の人此演説の狀を評して「リンコルンの演説は餘りに酷く人の心を打つたから是等一嘆服

して宗敬の念胸中に充ち、拍手も出來ず喝采もしなかつたのである。其状態は宛も會堂に於ける説教に對して何人も尊敬の念の爲に拍手喝采の不能なるが如きものと同様である」と云つて居た。

エベレットは人格極めて高き人であつた、政治上の経験、政治上の熱心、其學問の博宏一代に抜んでたる偉人で、其演説も皆後代に傳つて居るが、其人がリンコルンの五分演説に及ばざること遠しと自白し、敵も味方もリンコルンの五分演説に感嘆推服した。是は修辭の力に非ずしてリンコルンの人格と確信の現はれて言語となつた雄辯の極致が、斯の如き結果を齎したものである。此の一例は前段

に述べた説を證すべき適例と思ふ。(島田三郎)

其四 人を傾聽せしむる方法

(一) 學問と常識の必要

辯論を研究すると云ふことは今日最も必要である。政治の爲にも社交の爲にも亦事業の爲にも、何れの方面に行くにしても辯論の力を養はなければならぬ。而して如何なるものを雄辯と云ふか。此の解釋は色々あらうが、よく人は言ふ「唯饒舌するだけが上手になつても仕方がない、演説使ひになつたとて夫程偉くはない」と、誠に

其通りである。口は禍の門、と云ふ通りそれが爲に罰金を取られたり、不測の災を被ることがある、併しながら翻つて眞の辯論、眞の雄辯と云ふものは其の利益たるや非常に大いなるものである。所謂此の辯論家となる、雄辯家となる爲には先づ第一に知識がなければならぬ。學識無くして徒らに長廣舌を弄した所が、誰れも敬服して聞く者はない。故に諸君は學問をすると云ふことが必要である、とは云へ學識に富んで居るのみで宜いかと云ふに決してさうでは無く唯アカデミツクのことを言ふても聽衆は満足せぬ。故に又必らず世間的知識がなければならぬ、世間的知識と云ふものがあると其の辯

論は力を出し、人をして傾聽せしむる事が出來て來るのである。この二者が備はつて居れば實に申分がないのであるが、それで人は未だ感心しない。

(二) 同情と頓智

人は同情と云ふものがなければならぬ、如何にも人の感じた所を自ら感じて、他人心あり我れこれを忖度す、といふやうな人の心の中を想像し得て、己れの言葉が人の何の邊にまで達して居るかと云ふことを察し、以て感情を起させ同情を注がしめなければならぬ。其所で學問あり經驗あり常識あり同情ある上に尙ほウイットと云ふ

ものがなければならぬ。頓智がなければならぬ。唯六ヶ敷い事、唯理窟張つた事を言つても、是では聴く人が厭きて了ふ。厭きるから十分に自分の考へ、自分の説が届かない、早く人を嫌厭せしめるやうでは、已れの説に敬服せしめることが出来ない。聴衆が厭きて來た時分には少しく心を慰めて休息させ、又續けると云ふので始めて已れの趣意を貫徹させることが出来るのである。或る場合には人の願を解くまでのウイットがなければならぬ、其他條件は色々あるだらうと思ふが、先づ兎に角それだけのものが無いと即ち人の辯論を成さないのである、諸君が雄辯會を設けて常々互に切磋琢磨して演

説をすると云ふことは至極結構である。で、時々又デベートすると云ふことが必要で、今日殊に議會に於て已れの説をし、敵の論鋒を挫かうと云ふにも討論の力と云ふものを養はなければならぬのである。故に偶には討論の稽古をしなければならぬ。

(三) 人に感動を與ふる一大要素

併し最も有力なものは何であるか、假令其の人が如何に雄辯滔々と述べ立て、言ふ所學識に富み經驗に富み常識に富み同情に富みウイットに富んで居り、如何に立派であつても、其の人に一點人格の缺點があつたならば、聴者に對しては唯一場の話聴くに過ぎぬ。

何んの感動をも與へることは出来ない。彼の男は斯う云ふこと言ふたが、彼はシーメンス會社或はアームストロング會社からコンミツションを取つて居る奴のちや無いかと、頭から馬鹿にして掛るから其の人の言ふ所の辯説には威嚴が無い。聽く者に何の感じをも與へない。假に此人が千萬言を盡して説いた所が何の効目もない。高さ人格の備はつて居る人の一言の方が遙かに力あるのである。眞の辯論の中心は其の人の人格に在るのである。グラッドストーンは雄辯家であるが、雄辯を以つて人を感服させるのは其人の人格である。アスキスの偉いのはあの人の人格に在る、然らば諸君も先づ其の人

格と云ふものを中心として、人格を脊骨として、其の脅骨に肉を附け血を通はせると言ふやうになさなければならぬ。經驗は肉となりウイットは血液となつて、斯くして立派なエロクエンスが出来るが或人が言ふ言葉に、唯長廣舌を弄して議論をすると云ふのは全く以上の資格を備へないからである。眞の辯論家となるには、眞の雄辯家となるには、此の完全なる意義に於ける雄辯家となると云ふことに努めなければならぬ。之に依りて知識を附け、之に依つて常識を養ふことも出来るのである。(鎌田榮吉)

其五 聽衆に暗示を與へる方法

(一) 暗示の力

壇上の一言直に人を動かすものは暗示の力である。緻密なる思索
精細なる観察は辯士に欲ぐべからざる條件ではあるが、緻密なる推
論や精細なる説述法は人をして理解せしむることは出来ても、感動
せしむることの出来るものではない、「學者と共に考へよ、俗衆と
共に語れ」俗衆に理解せしむるだけの講話でも、學者らしき推論、
専門家特有の言語では其の目的を達することの出来ないもので、經

驗ある講演者は常に専門語の通俗化、耳に入り易き推論を用ゐんと
苦心して居るほどであるから感動を目的とする演説に面倒な理窟や
難解かしい言語は大の禁物である。

一體「人は理性に動くなり」などいふて人間といふものを論理の
機械のやうに思ふのは一大謬妄で、人間は決して冷かなる論理の機
械でもなく、理性によつてのみ行動する單純なものではない。一切
の議論の後には趣味の背景があり、主義主張の本には情執の根深く
流れて居るものがあつて、其の背景に左右せられ、其の根に動かさ
れて理窟や推論では如何ともし難きものがある。理を以て立つもの

は理を以て破れるわけであるが、「道理はさうでも、さうは思はれぬ」といふ悪い執着が根強く心の奥に蔓つて居る、學者已に然り、況んや俗衆をやで、俗衆の行動は主として習慣と模倣と暗示とに支配せられて居つて推理の力なぞといふものは極めて微弱なものである。しかも其等の俗人を一所に集めて群衆の状態に置き、之を動かさんとするに、勞徒らに多くして功頗る少いのは當然の理といふべきである。

(二) 群衆の被暗示性

ルボンもいふた如く、個人々々としては理性の備つたものでも群

衆になると其の個性に消失し、其の理性は影を潜めて、本能の力は頭を擡げ、意識的狀態より無意識的狀態に入り、傳染せられ易く、暗示せられ易くなるものである。此の者共に對して精到なる推論を振り廻し、緻密なる理窟を列べ立てたからとて、所謂大聲は俚耳に入らずで何の反應もあるべきものではない。ルボンは這の間の消息を道破して、「群衆は緻密に思考せられ精到に推論せられた千言萬語の名論占説よりも、耳に入り易き片言雙語に動くものである」といふて居る。

群衆の心理既に斯の如しとせば、群衆を動かすものは理論にあら

ずして簡單なる捉言である。シセロの多くの雄辯は忘れられても、「自由は羅馬人の特權なり」との一語は深く聽衆の腦裡に印し、バトリック、ヘンリーの千言萬語を思ひ起さずとも「我に自由を與へよ然らずんば死を與へよ」の一句は聽衆をして忘るゝなからしめたのも亦全く此の簡單なる捉言の力である。矢野龍溪氏の「浮城物語」に「我れに經驗あり、他國の士兵を率ゐるの法號令の簡單なるを要す、進撃、發銃、緘引、休息の四語を知れば足れり」とあるのも此の群衆の心理状態を看破したものである。ケル、スコットの「雄辯心理」にも亦此の心的状態を捉へて「人間を指揮する偉大なる人物

は決して其の部下を推論するに長じたものでもなく、又人間を感化する偉大なる人物は尤も論理的に自己の眞理を群衆に現はす人でもなく、彼等は其の言語態度等の刺戟によつて聽衆を暗示するものである」といふて居る。

吾等が平常の行爲は一の動機の起る毎に、之れを他の動機と比較選擇し、其の何れに就くべきかと思慮し、思慮の結果、之れを決定するの順序を取るものがあるが、大雄辯に接する時は其の順序は全く忘れられて、其の言ふ所直ちに暗示となつて何の選擇なく直に決定となり行爲となるもので、かく聽衆の心理をして選擇し、思慮する

の暇なからしめ、直に辯士の所説に服従せしむることを得ば、之れ演説に於て尤も多く成功せる時である。

(三) 被暗示状態

如何にすれば斯く爲すを得べきか。催眠術に云ふ所の暗示の理法は悉く演壇に應用せらるゝので、先づ聴衆をして暗示を受け易き状態に置くと云ふことが必要である。暗示を受け易き状態とは其の個性の力を微弱ならしめ心内に起り來らんとする他の觀念を防止するので、之れには個人的状態を脱却して暗示を受け易い聴衆の状態に置くを第一とせねばなぬ、如何にすれば聴衆の状態に入らしむること。

とが出来るか、これはスコットもいふて居る通り

一、聴衆と辯士とを密着せしめ、聴衆と聴衆とを密着せしむること。

二、聴衆をして同一態度を取らしむること

が尤も必要である。聴衆と辯士との間が餘りに離れて居つては、心と心と相通せず、辯士の強烈なる觀念を以て聴衆の微弱なる觀念を征服し、彼等をして殆んど電氣を受けたる如くに、其の暗示を受けしむることが出来ないのであるから、聴衆と辯士とは成る可く密着しめねばならぬ。聴衆と聴衆との間隔が甚しくは相互に個人的

自覺が頭を擡げて、群衆の状態に入り難いのであるから、如何なる雄辯家も空席多き會場で演説を爲難きを感じるのは、全くは聽衆個々離れ離れになつて暗示を受け易い群衆の状態に入らないからである。之に反して聽衆の肩と肩相觸れ、手と手と相接するやうに密集して居る時は心的共通此の間に行はれ彼等の感情をして、同一方向に向つて赴かしめ易くなるから其の演説も亦調子づいて其の暗示も亦功を奏し易くなるのである。次ぎの同一態度を取らしむるとは、一齊に敬禮せしむるとか、同じく唱歌せしむるとかするのでスコツトは之れに就て予は米國の偉大なる傳道者が讚美歌を謳はない聽衆

の一人に無理に讚美歌の本を渡して謳はせやうとしたのを見て、其の用意の周到なるに感じたと云ふて居る。日本の傳道者の中にも此の手段を取つて居るものは少なくないので、佛教徒の方でも一齊に念佛や三歸を唱へさせてから説教するのは普通のことであり、或る禪師は登壇後五分間は靜座冥想せしめてから話を初め、教育演説家として有名なる某氏は最初に必ず勅語を朗讀して聽衆を同一敬肅の狀に居らしむるのもある。これらは皆な群衆心理の狀態に至らしめ暗示を受け易からしむる一種の手段であり方法である。

(四) 會場の整理

次に必要なるは辯士の興へたる觀念をして聽衆の心理を占領せしめて、他の觀念を起さしめぬやうに、聽衆の意識を制限し、一も二もなく其の云ふ所を受入れしめんとするので、それには會場を整理して聽衆の觀念を成るべく平穩なる状態に置かねばならぬから場内の喧擾を止め、其の喧擾に依つて觀念の集注を妨げざるやうにせねばならぬ。不注意なる司會者が聽衆の耳目の焦點たる辯士の前後左右を往來したり、不謹慎なる來聽者が互に耳語したりするのは辯士の暗示力を妨げ、其の演説を困難ならしむる主要の因を爲すものである。況んや悪罵冷評交も起つては暗示力を排斥し、反對觀念を

聽衆の心理に起さしむるのであるから、先づ此の喧擾を静めねば有功に演説することが出来るものではない。

(五) 威 嚴

聽衆を被暗示状態に置くの第一義は辯士に威嚴がなければならぬ。若し辯士に何の威嚴もなく初めから輕侮を以て迎へられた時には反對觀念が聽衆の心理に跳梁して其の説服に幾多の困難を経ねばならぬ。ルボンが之れを論じて「威嚴は吾等の心意上に及ぼす一種の威壓である、此威壓は吾等の批判的機能を麻痺し驚異と尊敬とを以て其の心を満たすものである」といひ、これを後天的と先天的に分

けて居る。後天的とは家名とか財産とか肩書とか世評とかを指すので、之れが聴衆の心に與ふる威歴は偉大なもので、其の名を聞いて初めから感服してかゝるのであるから、暗示を受け易いのは言ふまでもなく、甚しきは家を出る時から暗示を受ける準備をして居るやうなものもある。先天的といふのは全く其の人固有の性格で聖賢や偉人に見る所の人格の力である。これ等の威歴は暫く別として、直に壇上に於ける辯士に就ていへば、其の登壇の初めに於ける態度が一種の威歴となつて聴衆の第一印象を與へるもので、禮儀正しく態度に品位あらんか、其の第一印象に於て信用を置き、耳を傾くるの用

意となるが、若し如何にも無作法で品位なき態度ならんか、其の第一印象は輕侮となつて暗示を受け難き状態に入ものである。

(六) 説述方法

態度先づ聴衆の信用を得ても、説述の方法宜しきを得なければ、疑惑の念起つて信服の態度は一變して批評的となり、疑惑募るに従つて、苛批酷評となつて暗示は到底功を奏し難きに至るのであるから、辯士は登壇の初めに聴衆の疑惑を一掃して其の所説に信用を置かしめねはならぬ。彼のマークアントニオがブルタスの後に立ちて「予はシーザーを弔らはんが爲めに來つたのでシーザーを辟護せん

がためではない」と揚言して陽にブルタスを賞讃して聴衆の疑を解いた如きは尤も狡猾なる説述法であり、殊に多くの反語を用ちて次第々々に聴衆の心を自己に傾けしめ、終に全く聴衆を魅了つて其の心を被暗示的狀態に置き、聴衆自ら期するが如く聴衆をしてブルタス反抗の聲を挙げしめたのは、尤も巧みに群衆心理を利用したる説述法である。曾て某政黨の名士が反對黨の盛なる所に遊説を試み出る辯士も出る辯士も、冷嘲熱罵の爲め妨げられ、演説半ばならずして壇を退く後に出て、雨と降冷評を耳にもかけず、靜かに口を開いて「當地は舊何々藩の領地であつた、抑も藩祖何々公は……」と

藩祖の功績を述べたてたから誰一人冷評するものもない、斯く諄々と藩政の事を賞讃して終に現政府の方針とを比較し、「其の藩政の下にあつたものが……」といよく本音を吹き出した時には敵も味方一齊に喝采して全く其演説に釣り込まれてしまつたといふことがある。これも亦説述方法其の宜しきを得たものと云はねばならぬ、此の如きを間接暗示といふ。間接暗示は巧みに反語や諷刺や嘲諷を用ゐて陽に聴衆の意を迎へつゝ陰に自己の所説を述べ、知らず／＼の中に群衆をして自己の所説に同せしむるので、ショットは之れに就て「此の方法によつて辯士は自己が結論を表現する前に群衆の心裡

に辯士の結論を待たしめ、辯士が結論に達するとき、群衆は其の心に期したるものと一致するが故に、確乎たる真理として受け込みしむることが出来る」といふて居る。此の暗示は修辭上の技巧を要する困難なるものではあるが、古來雄辯家の尤も多く使用せるものである。

(七) 斷言と反覆

直接暗示の文法は簡單にして奇抜なる斷言で、何等の考慮を費さずして暗示の受け入れらるゝもの、即ち否か諾かが判然と表示せられ、解説や立證の必要なく且つ全然非讓歩的なるを要するので、少

しでも説明を要したり、例證を挙げねばならなかつたり、又讓歩的の句が加はつては緊張したる群衆の心を弛めて被暗示的狀態を脱して批判的狀態に入らしむるものであるから、匕首を以て直に肺腑を貫く如き明確なる斷言でなければならぬ。其時に奇抜なるを要するのは、平凡であれば刺戟が強烈でないから暗示を受くことが強烈でないが、奇抜なれば奇抜なるほど注意力を集注して暗示を受け易からしめるのである。併し其事があまりに奇抜に走つて聽衆の實生活と没交渉では、又之れを受け入れることが出来ないものであるから平凡なる真理の奇抜なる言ひ廻しは演説家の尤も工夫を要する所で

ある、若し夫れ其の断言が反覆せられ一回二回と數を重ねれば、最初はさほごまで感ぜざりしことも、上手な大工でも釘は一邊には打てぬが、下手でも何邊も打ては釘が入込む」といふ如く繰り返し繰り返しする中に自ら聴衆の心に浸徹して明確なる眞理として受入れられる。

(八) 暗示と人格

暗示には強烈なる刺戟を要する。演説に於ける暗示は主として口より出でて耳に入る音聲の力であるから、此の音聲が何の刺戟もなき手ぬるき調子であつたならば、聴衆の心は他に散亂して雑多の觀

念其の間に起つて被暗示性を攪き亂すのであるから辯士の腹の底より出でて聴衆の腹の底に入るほどの力強きものでなければならぬ。所詮暗示は強力の威壓であるから力なき音聲は何の反響をも與へることが出来ない。力ある音聲は辯士の熱情より出るもので、熱情のない演説に力ある音聲の出るべきではない。力なき音聲は暗示を與へ難しとせば演説に於ける暗示奏功の第一義は辯士の熱情である。自ら感憤せずして他を感憤せしむることは出来ない。雄辯の奥には感憤あり、此感憤迸つて人を動かし、此の熱情溢れて人を感せしむ如何に技巧を弄するとも、此の感情なきものは皮相の態度虚偽の言

論である。

(1)

● 宮事

◎ 鳳輦臨幸奉迎の辭

維れ時明治某年某月某日、爰に吉辰をトし、本市且民等某紀念祭(大頌徳會)を某公園(某々場)に行ひ(開き)以て報恩酬徳の微衷を表彰し(國運隆盛の光榮を祝頌し)上は以て益々皇室の尊榮と國威の宣揚を期し、下は以て愈よ衆庶の康福と富強の増進

を望むに際し、陛下の聖徳宏渥なる、臣民等の情願を許容せられ、畏くも、鸞輅親臨して、臣民涓滴の誠意を嘉納し給ふに値ふ、洪恩の優渥なる、山高海深も管ならず、臣民等歡天喜地、手足の舞蹈を知らず、寧ろ感泣の情に堪へんや、臣民等聖壽の萬歳を祈ると同時に、益々精を勵し業を勤め、以て洪恩の萬一に敬報せざるへからず、因て蕩蕩の一言を上り、誠恐誠惶謹んで祝す、

● 鳳輦巡幸歡迎の辭

伏して惟れは、我輩聖文武なる 天皇陛下の國家を憂慮し給ふや、踐祚以降、宵衣旰食、唯々治維れ圖られ、屢々四方に巡幸し

て、親しく民庶の疾苦を問ひ稼穡の艱難を視そなはされ、撫恤至らざるなし、豈翹々屋上煙を望み、寒夜衣を脱する而已ならんや、普天の下、王化の及はざる所なく、率土の濱、皇澤に浴せざる者なし、今又 鸞輅我地方に幸せらるゝに遇ふ、嗚呼明治臣民の福祉なる、昭代に遇ふて恩露に潤ふ、此の如く其れ優渥なり、加之、頻年豊登、物産繁殖す、民業益々興り、國力隨て増す、豈鼓腹擊壤も、亦以て我治を謂頌するに足らんや、是れ偏に 陛下徳化の致す所に、職由す、内は以て社稷を泰山に安置し、外は以て國威を海外に宣揚する、豈其れ偶然ならんや、苟くも臣民たる者、皇意を奉體し、業務を勉勵して、富強の大本を培植し、

以て天恩に報いさるへからず、謹んで一言し以て億兆歡喜の衷情を表す、

鸞輅を奉迎し、謹んで

●立太子式舉行の祝辭

凡そ覆載の間、萬邦星羅し、立君罔亦甚た多しと雖も、皇統一系寶祚連綿以て萬世不易の國體を成す者、唯一の我大日本帝國あるのみ、世界古今を通して、我に比すへきの邦國なし、是れ我美國として、宇内に誇稱し、萬邦亦尊稱して、措かさる所以なり、今上陛下皇室典範を欽定して、寶祚繼承の大典を確定し、皇室の基礎をして、前途益々鞏固ならしむ、皇運の隆盛疆りなく、王道の振興窮りなし、今儲君既に長して、立太子式を舉行

せられ、帝室の尊嚴と、皇國の威權とを併せて、將來に永遠に、益々鞏固して且つ隆んならしむるに遇ふ、臣民誰か帝室の萬歳を唱ふと、共に、皇太子殿下の徳望甚た嵩さを仰ぎ、聖壽必ず長さを祈らさるべけんや、國家の慶祥、億兆の歡喜、此式の舉行より大なるは莫し、謹んで清扈を擧げ、以て祝意を表す、

●皇太子の游幸を歓迎する文

皇祖皇宗の寶祚を紹繼し、帝國前途の萬機を統治せらるへき我皇太子殿下には、聰明叡智にして、天資の帝徳を有し給ひ、迅に學習院に入りて、内外の學を修め、軍人職に就て、軍旅の事を講し、勤勉琢磨、其學大に進み、聖算猶幼冲に在らせらるゝと

雖も、既に雄飛國に主權者たるの徳望あらせらるゝは、屢々平常の嘉言善行に顯はれ、國民舉て欽慕感佩する所なり、故に各地に遊幸せらるゝも、其行を苟もせず、治績を視、民情を問ひ、以て他日皇統を繼承せらるゝ時の參考に供し給ふが如きは、殊に感佩し奉るべきの美德にして、我々臣民は、上に 聖天子を戴き、又賢良明敏なる儲君の出づるに遇ふ、何の幸福か能く此れに過ぎん、今又我地方に遊幸あらせらる、恩露我郷土に及ぶと聞き、欽慕の情に堪へず、爰に道路を洒掃し、謹んで奉迎す、

●親王宣下を祝する文

(嘗て同學の交りを)常に眷顧の好みを辱ふせらるゝ、某王殿下

には、學院に勤學せらるゝこと、(海外に留學せらるゝこと)、既に年あり、資性睿敏にして、加ふるに勵精を以てし、能力發達し、學藝速進し、皇族中卓然として、既に頭角を顯はし、年猶少ふして、親王宣下を拜受せられたり、前途皇室の藩屏として、帝徳を補翼すべき者、殿下を措て又誰れをか求めんや、洵に他日の望みを屬すべきは、殿下に在り、劣生の殿下に於ける、天冠地履の懸隔ありと雖も、交誼の至情に至ては、敢て以て遠しと爲さず、今親王宣下の慶報を拜聞し、歡喜の情に堪へず、謹んで蕪詞を裁し以て奉祝す、

● 榮事

● 受爵を祝する文

今回某君閣下(貴下)功勳に依り、(父祖の功勳に依り)特に某爵を授與せらるゝの大光榮を拜受せらる、此れ其功勳の顯著偉大なるに依り、獨り一身の名譽たるのみならず、皇國の奎光を添加する者と謂ふへし、竊に按するに、授爵は特殊の典例にして有功者を優待し、併せて第二の功勳者を勸誘するの旨趣に出づるや明かなり、故に授爵者の増加する毎に、國威國力も亦必ず増加すへし、豈に國土の奎光を添加すと謂はざるへけんや、矧んや、閣下の如き、(貴下の父祖の如き)其功勳最も大なるは、國

家に盡されたる事績に、徴して、顯著なるをや、此れ授爵の特典ある所以にして、爾後益々國家の利益を計畫せられ、以て特殊の優待に報答せらるへきは、敢て信する所なり、生亦辱知の斑に(舊藩士の末)に列するを以て、并喜措く能はず、謹んで祝辭を呈す、

● 陸爵を祝する文

某君閣下、曩に功勳に依り、殊に某爵を授けられて、帝國の華族に列せられ、閣下の名譽は、内外に煌耀せり、閣下榮地に就かしめらるゝと雖も、勉めて謙徳を修め、小心翼翼として、益々職務に努められ、其功勳更に顯はるゝに依り、陸爵を授けて、進めら

る、此れ閣下は誠に蓋世の卓才を以て、國家の柱石たるに依る、閣下の顯職に就てより、國利國益を増進するに努めたるは、内外人の知悉する處にして、今回の榮陞は、洵に多年功勞の結果に係り、生等亦閣下の榮爵を祝賀すると同時に、閣下の功勞を謝せざるへけんや、謹んで一言を呈し、以て祝意を表す。

●某爵の家督相續を祝する文

何位某爵某君閣下、(貴下)資性慧敏にして、多年學を勤め、嗣子たるの任を辱かしめず、明治某年某月某日を以て、家督相續を仰付られ、爰に某家に主たるの光榮を得られたり、亡父君某爵閣下は、(明治の功臣(舊某藩主))として、帝國華族の榮地に列せられ、

貴家は殊に名聲噴々たる門家たり、閣下賢能の才を以て、其家を繼がる、一家の名聲愈よ揚り、父祖の功勳益々顯はるへきは、期して待つへしと雖も、貴きに居て心驕り、才を特んで業を怠れば、亦家聲を落すの憂ひなしとせず、閣下今より自戒勤勉止に貴族たるの地位を保つに努むるのみならず、皇室の藩屏として、賢徳を修めて、國家に盡くし、貴家をして益々榮名を揚げしむるは、敢て閣下の爲めに望む所なり、閣下幸に獻芹の微衷を棄てず、今より吾人の望みに副はるゝあらば、豈に唯よ一家の光榮たるのみならんや、爰に蕪詞を呈し、併せて名家の繼襲を祝す、辱生某(舊藩人)某敬具。

◎ 舊藩主の來遊(移住)を迎ふる文

我舊藩主何位某爵某公、舊封内の人民と舊誼を煖むるか爲め來遊、(閑地を舊封内にトして、晩年を風月の間に送らるゝか爲め)、舊封内の人民と舊誼を煖め、與に共に殖産の事業を經營せらるゝか爲め、移住せらるゝに遇ふ、我地人民誰か雀躍して歡迎せざらんや、今や時世の變遷に依り、既に君臣の關繫を絶てりと雖も、其情誼に至ては、寧ろ益々厚さを加へ、公の來遊(移住)を寬望するや、既に久し、今其望み空しからず、遠く來遊せられ(永々移住せられ)て、親しく朝夕警咳に接し、(舊襟を開て歡情を盡くし)、舊臣民を棄てず、共に舊封内の公益を計畫せられんと

す、舊臣民の歡喜、何そ此れに過さん、謹んで路を掃ひ席を清めて歡迎す、

◎ 貴族嗣子の誕生を祝する文

謹んで按ずるに、一家の慶福、嗣子を擧ぐるより大なるは莫し、世襲の名家にして、若し螟蛉の子をして繼かしむるあらば、其名聲更に揚るも、祖先の亡靈、亦憾みなしとせんや、人の孜々業を勤めて、財産を貯蓄し、又は榮爵を冀望するは、子孫をして餘慶を受けしめんか爲めのみ、家に貴爵と財産とを有し、嗣子ありて之を繼承せしめ、系統連綿として、子孫繁殖す、一家の慶福此に至りて極ると謂ふへし、何位某爵某君閣下、天慶を受けて、

熊羅夢に入り既に桑弓の式を行ひ、嗣子此に定めり、敢て閣下の爲め、又貴爵の爲め、慶賀せざるへけんや、矧んや、令息天稟の資才は、呱呱聲中に顯はるゝに於ておや、貴家の光榮、今より期して待つへし、因て一尾の鯉魚に添へて、祝辭を呈す。

● 祭事

● 新年祝辭

朝噉々として東天に昇り、瑞氣靄々として四街に溢る、仰ひて九霄を望めは、紫雲駿鸞として空を罩め、伏して千門を觀れば、旭旗翩翩として風に飄へり、家々の歡呼湧くが如く、戸々の

松竹復た新たなり、指を屈すれば、明治中興の昭代に遇ふてより、星霜を閱する、二十有八、人口を加ふる四千萬餘、民煙益々殖て、人業愈よ興り、年一年に國力を増し、征清の戦功を收め、膺懲の實効を奏してより、我國威は東洋に雄飛し、新領臺灣の亂賊亦既に戡定に歸し、世界強國の一に列するを得て、今又新年を迎ふに値ふ、吾人豈に太白を浮へ壤土を撃て、昇平を謳歌せざるべけんや、爰に席を清め、服を改め、一家團樂として五辛盤を供へ、屠蘇酒を傾け、先づ帝國と皇室の萬歳を祝し、九重の天を拜して、國運の益々隆盛ならんことを望み、併せて一家の愈よ繁榮せんことを期す。

◎ 四方拜の祝辭

伏して惟れは、天祐を有して、皇祖皇宗の遺業を紹き、皇統一系の寶祚を踐んで、大日本國の土地人民を統治し給ひる、我天
 皇陛下には、文武叡聖にして、明治中興の洪業を成し給ひしよ
 り日に月に國家の安寧を鞏固にし、億兆の康福を増進するに
 黽勉せられざるはなく、帝徳の古今に卓絶たるは、巍々赫々として、臣民の仰望し且感佩し奉る所たるに拘らず、畏くも猶古
 典に依り、一月一日齋戒して、四方拜の式典を親行せられ、以て
 歴世の皇靈に祈り、帝國をして益々隆盛に、億兆をして愈よ安
 綏ならしむ、苟くも帝國の粟を食ひ、明治の民たる者は、帝意

を奉體し、皇國の神聖に依り、精を勵し業を勤め、以て臣民たる
 の責務を盡くすに努めざるへからず、實に本年の民業は、四方
 拜の式典を行はせらるゝ時より、更に勉勵の緒に就かざるへ
 からず、抑も四方拜の式典は、古來未だ曾て怠らず、年々之を行
 ひ、皇國の爲め、皇靈の祐けを仰かせらるゝの大典にして、萬民
 亦之に寄らしめらる、嗚呼、國威益々揚り、國民業に安んずるは、
 洵に皇室古來の式典を怠らす、皇靈の祐護し給ふに職由す、臣
 民亦豈歷朝の皇靈を拜して、其祐護を仰かさるへけんや、恭し
 く祝辭を裁して、誠意を表す、

◎ 元始祭の祝辭

一月三日を期し、歴世の皇靈に奠して、元始の祭典を行はせらる。此れ帝室古來の聖典とし、本年も亦例に依り、此祭典の舉行あり、恭しく惟れは我神聖なる大帝國は、皇統一系連綿として易らず、今より萬々歳に傳へて窮りなからんとす、而して國威は年を逐ふて揚り、國力は歳を重ねて振ひ、遂に征清の偉勳を奏して、帝國の地位を進めらる、此れ皇祖皇宗の遺徳に由ると雖も、而も亦今上皇帝陛下の聖徳至大なるの致す所ならずんは、あらず、惟ふに今元始の祭典を行ふに當り、歴世の皇靈必ず俾んて饗けさせ給ふのみならず、皇國の前途益々隆んならしむべきは、敢て仰信する所なり、私かに鄙言を捧けて、盛典を

祝す、

●皇靈祭の祝辭

正に是れ(三月二十一日に當り、春季皇靈祭)(九月二十三日に當り、秋季皇靈祭)の式典を行はされ、畏くも天皇陛下賢所に於て、親から其祭典を擧げさせらる、抑も皇靈祭は、皇朝古來の祭典にして、春秋二回を期し、嚴肅なる大奠禮を行ひ、以て歴朝の皇靈を奉慰せらる、伏して惟れは、皇靈は宮中の祭事に止らず、我皇國は歴朝皇靈の守護し給ふ神國にして、苟くも皇國の臣民たる者は、皆皇靈の遺徳に倚らざるはなし、是を以て春秋二回の皇靈祭は、皇國の大祭日とし、百官暇を賜ひ、衆庶業を休み、

均しく皇靈に奉對して、祭祀の誠意を表せしめらる、我徒亦皇國の一民たるを以て、爰に聊か微典を供へ、謹んで拜祀す、

●紀元節の祝辭

我帝國臣民は記憶せよ、本月本日は方に是れ紀元以降、二千五百五十五年に該當する節會なり、我帝國臣民は敬祭せよ、紀元節は帝國基礎の成立を告るの日たるを忘れず、萬世に傳へて國土の變易なからしむるを記念するの祭日なり、我帝國は皇祖の帝業を創し給ひしより、實に二千五百五十五回の紀元節を經過し、歴世の久しき、幾多の變遷ありしは、史乘に徴して明かなりと雖も、國土は世一世より開闢し、國力は年一年より増

進し、今上皇帝陛下、寶祚を踐ませ給ふに迫んで、至聰至明の聖徳を以て、民業を勸奨し、國益を計畫し、宵衣旰食、夜を以て日に繼ぎ、唯に内國の治績を擧ぐるに努め給ふのみならず、海外の制度に就て、其善美なるものを擇ひ、採て以て内國制度の欠點を補ひ、竟に千歲不磨の大憲を發布せられたるは、亦是れ紀元節の當日に在りて、本日は帝國に至大の關係を有する祭日なり、我帝國臣民は、須らく記憶して祭らざるべからず、矧んや征清の偉勳を奏し、國威既に揚りて、東洋に雄飛し、更に國光を輝すに於ておや、后土億兆の歡呼は、祝砲の響よりも盛んならしめ、帝國萬歳の呼聲は、普天率土に溢らしめて可なり、今祝盃

を擧ぐるに際し、謹んで所感^のを述へて以て愛國^のの誠意を表す、

●天長節の祝辭

爰^{こゝ}に恭しく皇朝^のの世數を算ふれば、今上皇帝陛下^にに至り、一百二十有一世にして紀元二千五百五十五年の星霜^を閱すと雖も、皇統^{一系}にして、萬世易^らす寔^に萬邦無比^のの美國たり、而して今上皇帝陛下^に、寶祚^を踐ませ給ひしより、天長の節會に値ふ、本日^を以て二十有八回とす、陛下^に猶春秋^にに富めり、今より尙數十百回の賀節^を迎ひ、臣民均しく其慶^にに倚らんとし、賀節に値ふ毎に、聖壽^のの萬歳^を奉祝すべきは言を俟たすと雖も、本年の賀節は、殊に酒盃^を擧て、祝意^をを表せざるべからず、回顧

すれば、陛下^に帝業^を中興^し給ひしより、宵衣旰食[、]拮据經營[、]孜孜汲々^{として}國土^を開明^に導き、國民^を文武^に誘ひ、聖徳^のの偉大なる、功績^のの顯碩^{なる}、殊に東洋列國^のの舊慣^をを排除^{して}、立憲政體^のの新制^を確立^せられ、百般^のの制度文物[、]駸々^{として}文明^のの緒^に就かしめたるは、古來歷朝[、]未た曾て其比^をを視^さるの宏謨^{雄圖}にして、乃ち帝國^をして今日^あらしめたるは、偏^へに陛下^のの聖徳^に由れり、然り而して、其最も仰望^{すべき}は、朝鮮^のの獨立^を助け、清國^のの暴戾^をを膺懲^し以て東洋^のの平和^をを克復^{して}、大に國威^をを宣揚^し、帝國^をして東洋^に覇^たらしめたるもの、即ち是れなり斯の如く偉大^のの威徳^をを顯彰^せられ、又戰勝^のの結果^と

して、新版圖を臺灣島に開き、皇威國權、赫々たる中に於て、天長の賀節を迎ひらるゝに遇ふ、臣民の歡喜、豈唯た鼓腹擊壤而已ならんや、仰き瞻れば、千門萬戸の旭旗燿然として、殊更に光を添へ衆庶黎民の歡聲雍乎として、國內に充溢する、豈其れ偶然ならんや、幸に酺宴の恩賜に與かる者は、宜く歡を罄くして、聖壽の無算を祝すへし、我徒亦爰に宴を開き、以て陛下の萬歲を祝す、

◎神嘗祭の祝辭

本月本日は、神嘗祭の期日に當り、例に仍て宮中に祭典の舉行あり、謹んで古典を按ずるに、神嘗祭は、太古皇祖の始めて民に

稼穡を教ふるや、其熟するを待ち、先づ之を奉薦したるに始り、其日は實に十月十七日なるを以て、此日を祭日とし、世々其古典を例行せられたり、今や、國土豊饒、地産益々殖す、是れ偏へに皇祖の賜に係るを以て、臣民亦本日を期し、齋戒沐浴、謹んで祭祀せざるへからず、爰に聊か祭典を行ひ、以て帝國臣民の誠意を表す、

◎新嘗祭の祝辭

維れ時十一月二十三日、天皇陛下賢所に於て、親から新嘗の祭典を行はせらるゝに際し、吾儕臣民亦祭典を舉げて、皇祖の神靈を奉祀す、抑も新嘗の祭たるや、皇祖蒼生を綏んするには

先づ其食を盈すへきを知召し、稻禾を狭田長田に植えしめられ、人民倚て以て食を得たるは、實に十一月二十三日なり、歴朝神宣の記念の爲め、且つ神徳に報い、併せて五雨十風の豊作を祈るか爲め、例して十一月二十三日を期し、其年の新穀を薦めて、神靈を祀り、皇帝亦始めて新穀を嘗るの式を行はせらる、依て名けて新嘗祭と曰ふ、天皇親ら此祭典を行ひ給ふは、人民に代りて、神徳に報い奉るの聖旨に出つ、我々臣民亦分に應し誠を表し、以て瑞穂國の民たるを記せさるへからず、謹んで新穀を供へ、以て敬祀す、

● 皇后陛下の誕辰を祝する文

我朝皇后に立てられ、人民の慈母として、淑徳を修め、慈善を施し、後世の龜鑑と稱されたる賢后甚た多しと雖も、未だ明治皇后陛下の右に出るものあるを聞かず、陛下の賢徳善行、枚擧に遑あらず、殊に 今上皇帝陛下を助けて、人民撫恤の策を講せられ、女學を奨勵し、病院を設立し、常に慈善の事業に努めらるゝは、賢徳の最も顯著なるものにして、億兆の感泣し措かさる所なり、嗚呼 今上皇帝陛下の至聖にして、側らに賢良なる皇后陛下のましますあり、明治昭代の月に年に益々隆盛を致す、亦洵に以ありと謂ふへし、吾人臣民幸に昭代に遇ふて、百陛下撫恤の恩露に浴潤す、何の福祉か能く此れに過さん、本月

本日は方まさに是れ皇后陛下の御誕辰おんたんしんに當り、仰慕きやうぼの情に堪へず、
遙かに陛下の萬歳を三呼し、謹んで祝す。

●皇太子殿下の誕辰を祝する文

本月本日は、皇太子殿下の御誕辰に當り、吾人臣民須らく奉祝ほうしゆく
すへきの日なり、殿下は他日臣民か、戴いたき以て撫恤おほしゆつを仰くへき
の儲君たくまじみにして、御誕辰を祝すると同時に、聖壽せいじゆの萬歳を祈望きぼうせ
ざるへからず、殿下の立て東宮に入らせらるゝや、年猶淺しと
雖も、天資てんし聰明めいにして、事を處する敏みならず、學成り智
進み、既に一天萬乘いつてんばんじやうの君徳くんとくを備へ給ひり、殿下今儲君に在りて、
聖明せいめいなる君徳くんとくを備ふ、聖算せいさんを加ふるに隨ひ、愈々聰明めいに、愈々敏み

敏みなるへきは、吾人臣民の且つ仰き且つ望む所なり、爰に御誕
辰を奉祝して、殿下の萬歳を唱ひ、併せて玉體ぎよくたいの健全けんぜんを仰祈おやうしんす、

●招魂祭を行ふ文

本月本日、特に勅使ちよくしを派遣はせんせられて、大祭おほまつり(臨時大祭)を靖國神社
(某招魂場)に行ひ、群靈ぐんれいを吊し、忠魂ちゆうこんを慰なぐさめらる、抑も此祭さい奠てんを受
る者は、國家の干城かんぢやうとして、軍人の名譽めいよとして、内に在りては國
難なんに殉じんして、禍亂くわらん戡定かいていの實効じつこうに與あつり、外に在りては征討せいたうに斃たれ
て、敵國てきこく膺懲おうちやうの偉勳ゐこんを奏し、其身は鋒鏑ほうてきの間に殞たふると雖も、其芳はう
名めいは永く祀られ、千歳に傳へて朽ちず、嗟呼ああ軍人の重任じゆうじんに在り
て、名譽の戦死を遂る者あらずんば、百萬の貔貅ひきゆうありと雖も、豈

に克く禍亂を排し、敵國を懲すを得んや、帝國の今日ある、偏へに殉難忠士の遺勳なりとす、洵に軍人の龜鑑にして、國民の模範たり、謹んで薄奠を供へ、葑菲を薦め、以て報功の微衷を表す。

●學事

●高等學校卒業式の祝辭

卒業生諸君、諸君は出藍の資才を以て、盛雪の苦學を積み、一定の學期を終へて、今其業を卒はられたり、此れ勉勵琢磨の結果にして、獨り諸君の名譽たるのみならず、又本費の光榮たり、然れども本費の學級は、専門學に入るの豫備門に屬するを以て、

諸君の學業已に終れりと謂ふを得ず、諸君の地位は、宛かも遠航汽船の或る港湾に到着したるか、如く、猶萬里の波濤を渡るにあらざれば、目的の地に達するを得ず、諸君は今より更に進んで長足の歩武を移すの決心なかるへからず、宜しく各自望む所の専門學に入り、國家必要の士と爲るを期せざるへからず、法理文醫及び農商工の諸學は、此れ諸君の今より宜しく擇んで就くべきの専門學にして、此等の學業を卒るの士、前後に輩出したりと雖も、明治の國家は、學士の需要を感ずる愈々急なり、何となれば、國家の進化は、實學の結果に係り、國家益々進化すれば、學士愈々用ゐらるればなり、矧んや明治の國家は、歐

米の強國と顔頑し、出て、百般の事業を海外に競争すへきの地位に進むに於てをや、豈に小成に安んじ、寸業を特むへきの秋ならんや、實に明治前途の國家は、後進たる諸君の双肩に懸れり、諸君の任も亦重しと謂ふへし、而して諸君の才に富み學に勤むる、能く重任を負ふて吾人の望みに副へ、必ず國家をして満足を得せしむへきを信す、洵に他日の望みを屬すへき者は、先輩の士人に在らずして、後進の諸君に在り、懋めよや諸君、今諸君が卒業證書を得るの光榮を受くるに臨み、諸君の爲めに一言し、以て祝辭に換ふ、

●答辭

生等寒鷲の才を以て高等の學を修む、勵精刻苦其業を勤むと雖も教員各位の循々誘導せられたるに倚るにあらずんば、豈今日の光榮を受くるを得んや、實に是れ教員各位の賜に係り、各位の生等に於ける、慈母の愛兒に於けるも曾ならず、生等何を以てか能く師恩に報いん、今過賞の言を辱ふせられ、生等に負はしむるに重任を以てせらる、生等の不敏にして微力なる敢て當らすと雖も、教員各位の賜を空ふせず、努力阻勉以て専門學を修め、他日幸に成績を覩るを得は、亦庶幾くは以て師恩を謝するを得ん乎、謹んで答ふ、

●高等師範學校卒業式の祝辭

爰に教育の實地に就き、既往の結果を觀るに、學制其宜きを得ると雖も、教員其人を得されは、其効顯はれず、學制は教育の機關にして、教員は運轉の技手なり、精巧堅牢の機關車ありと雖も、技手其人を得されば、豈之を千里の遠きに奔らしむるを得んや、教育の實施も亦然りとす、而して本校より出づる卒業生は、教育の實施に就き、技師の任を負ふて、技手を養成する者なり、其任亦重しと謂ふへし、矧んや社會勃興の時に際會し、教員養成の事、最も急須なるおや、惟ふに尋常師範學校の生徒にして、其成績擧らず、又は業成りて教育實施の任に當らしむるも、其効顯はれず、此れ皆責めを本校卒業の諸君に歸せざるへか

らす、本校の目的は、小學教員の陶冶を以て諸君に任し、以て教育機關の運動をして滑かに行はれしめ、素絲未染の學齡兒をして、惡色に染ましめず、天賦の徳性を培養し、普通の學業を修得せしむるに在り、而して此目的を達すると否とは、諸君の今より陶冶すへき、尋常師範校生の成績如何に在り、諸君は本日其業を卒ると同時に、重大の責務を負ふの觀念なかるへからず、予は國民教育前途の盛衰消長は、一に諸君の勤怠如何に在りと斷言するに憚らず、然り而して諸君の學能ありて勉勵なる、必ず誓て教育の目的を達せらるへきを信す、此れ予が特に諸君に屬する所の望みなり、諸君幸に首肯せよ、

◎答辭

生等不肖にして資才なしと雖も、苟かに抱負する所ありて本校に入り、校長閣下の勸誘と教師各位の薫陶とに依り、幸に學業を卒り、今盛式を舉げて、證狀を授與せらる、生等の光榮、何ぞ此れに過ぎん、且つ校長閣下(某君貴下)より懇篤なる衷言を與へらるゝに遇ふ、生等豈に眷々服膺感奮勵精して、高論に副はさるへけんや、生等謏劣驚才、學識亦淺々、出て、教育の事業に當るも、重任に堪へざるを懼る、然りと雖も、幸に教師各位の賜ものたる平素の教訓に由り、小心翼翼々、業務に勤勉し、本校の卒業生たる名譽と品位とを失墜せざるに努め、一は以て師恩を

謝し、一は以て國家に報いんとす、謹んで一言を述べ、以て答謝す。

◎女子高等師範學校卒業式の祝辭 文部大臣の祝辭

諸君、今日女子高等師範學校の卒業式を舉行するに當り、此席に臨むことを得たるは、本大臣の欣喜する所なり、願ふに女子の教育は、社會の文明を増進する要素にして、風俗の汚隆、徳義の消長、盡く女子の教育に淵源すると云ふも、不可なかるへし、即ち文明各國か、女子教育に重きを置く所以なり、維新以來、制度文物の盛なる暇々乎として、百事面目を改め、所謂一瀉千里の勢を以て、遂に今日あるを致せり、但し文明は皮相なるへか

らす、人心の内部に根底するにあらざれば、其基礎固からず、而して文明の基礎を固くするには、女子智能の進歩に因らざるを得ず、本大臣は社會を擧げて、大に女子教育に重きを置かんことを欲す、卒業生諸君、諸君は多年勉強の結果に因り、今日其目的を達せられたるは、尤も慶賀する所なり、諸君は他日人の師と爲るの人なり、他日人の母と爲るの人なり、其任も亦重しと云ふへし、諸君は各自に一國の文明を増進し、一國の風俗を扶植するの要素たることを、永々心に銘せられんことを望む、

◎ 答辭

妾等不肖の身をもちて、今日盛典を擧げられ、卒業證書を授與

し給ひるに遇ふは、偏へに校長教官の君たちの賜ものにして、其恩の深きは、海原の底も比ぶるに足らず、固く心に銘して、何れの時か忘るへき、今より進みては心の及はん限り、力の至らん限りは、ひたすら教育の事に従ひ、退きては身を修め、心を磨き、女の道を盡くして、積もりて深き師の君の御恩に報いんと誓ひはへれり、爰に拙き一ふしを述べ、謹みて謝し奉りね、

◎ 高等商業學校卒業式の祝辭

本日高等商業學校卒業式の盛典を擧行せられ、卒業生諸君は、今より出て、實地の商業に就かれんとす、不肖幸にして、席末に列することを得たるは、不肖の光榮とする所なり、因て一言

を述べて、卒業生諸君に告げ、併せて本校陶冶の實効顯大なるを祝せんとす、卒業生諸君よ、諸君は炯眼を開き腕力を鍊り、今日の商業界は、千軍萬馬の劇戰場たるを記せざるへからず、跼々踏々として一市場に奔り、毫釐の損益を區々たる小域内に競争したる時代は既に去れり、冷く視線を宇内の大市場に及ぼし、最も狡猾にして最も敏捷なる外商等と、競争するの觀念なかるへからず、今や世界は到る處として、商業の競争場たらざるはなし、實に第二十世紀の國家をして富強ならしむるは、一に商業の發達に在りと謂ふへし、内に物産の増殖ありと雖も、外に販賣の通路あらずんば、何に由て能く富強を致さん

や、貿易の業たる、理財の道たる、運輸や賣買や、皆是れ商業者の任務にあらざるはなし、而して諸君は第二十世紀の商業界に出て、將校と爲り幕僚と爲り、作戰策を講して、海外の強敵に當るの任を負はんとする者なり、帝國前途の富強を以て、自ら任せんとする者なり、社會今日の文明は、商業發達の結果に係り、文明愈よ進んで、商業益々盛んなるへきを以て、世人重きを商業に置くに至り、諸君の任は前途倍す重きを加ふるあらんとす、而して諸君は敏才を有し、學識に富めるを以て、後進の指揮者と爲り、能く勝利を宇内の商業場に收めらるへきは、敢て信ずる所にして、諸君も亦此志を抱へて、社會に立たざるへか

らす、然れども學ふは易ふして行ふは難し、諸君は今より一層奮勵し、多年苦學の實を擧げ、商業界の運動をして、更に活潑ならしめ、以て帝國の富強を増進するに努められんと希望の至りに堪へず、

◎ 答辭

生等瑩雪の業に勤る三年、爰に卒業證書を授與せらるゝに値ふ、此れ苦學の結果に係ると雖も、校長閣下と教官各位の懇篤なる誘導に由るにあらずんば、豈に今日あるを得んや、山海の恩謝するに辭なしと雖も、生等の前途は遼遠なり、生等の將に就かんとする業務は多岐なり、實に現社會は商業の競争場に

して、一事として商業の關係を有せざるものなし、故に致々として事に従ふあらば、生等各自其志す所を異にするに拘はらず、庶幾くは師恩を謝するの辭を得るの日あらん乎、生等奮進敢爲事に此に努るあらんとす、謹んで答辭す、

◎ 東京工業學校卒業式の祝辭

諸君は、今茲に學成り、業遂けて、卒業證書を授與せらる、前途大に望みを諸君に屬せざるべからず、我國家の前途を觀察し、民業の緩急を熟考するに、最も急速の進歩を爲さしめざるべからざる者は、工業なり、農商の二業は、稍や已に發達の緒に就くも、獨り工業に至ては、遅々として振はす、此れ人民勤めざるに

ならず、工業未だ進まざるの致す所と謂はざるを得ず、看よ平
 時に戦時に必要なる新式器械の如きは、概して輸入を仰くに
 ならずや、一の鐵路を築き、一の鐵艦を造るも、亦其材料を輸入
 せざるへからず、建築の業たる鑛山の事たる、其他百般の工業、
 皆未だ幼稚を免れざるにならずや、而して前途工業發達の指
 南者と爲り、内にしては自用を充たし、外にしては輸入を防ぎ、
 以て、百般の工業を進歩せしめ、復た欠乏を感ずるの憂ひなか
 らしむるは、今より諸君か負擔すへきの責任なり、諸君果して
 責任を盡すに努むるあらば、止に本校と諸君との名譽たるの
 みならず、我國家の利益を増進する、豈其れ偉大ならざらんや、

諸君思々念々、之を記して忘れず、奮て實學の顯効を擧げられ
 んことを希望す、

●答辭

生等迅に工業の急要なるを知り、本校に入て苦學功を積み、今
 幸に卒業證書を授與せらるゝに値ふ、生等の名譽是れより大
 なるは莫し、而して生等前途に負荷するの責任頗る重く、淺學
 微力、之に耐へざるを懼ると雖も、教官各位か授けられたる教
 訓と指針とに由り、奮勵努力、以て事に従ふあらば、亦庶幾くは
 工業の發達を致し、今日の名譽を保つことを得ん乎、多年の師恩
 を謝する、唯た此に在り、豈勉めざるへけんや、因て一言を述へ、

謹んで答ふ、

◎美術學校卒業式の祝辭

本校茲に陶冶の實効を奏し、前途有爲の卒業生若干名を出し、證書授與式の盛典を舉行せらる、此れ獨り卒業生諸君の名譽たるのみならず、帝國の一大光榮たり、抑も美術の業たる、帝國固有の技藝に屬し、中古足利氏の盛んなる時より、徳川氏の初世に至るの間、屢々戰亂の爲めに妨害せられたるに拘らず、百般の美術は駸々乎として進み、今猶存するものを見るに、其精巧なる、其美麗なる、内外人の目を驚すもの甚た多しとす降て近世に至り、百般の美術、藝薈として振はす、偶々之を觀るも、粗

造にあらざれば、摸擬に係り、古美術家の如く、新意匠を凝らし、て精巧妙を致すものあるを觀す、蓋し此れ美術は文明技上の一裁花たることを知らず、徒らに玩弄物視したるの致す所と謂はざるを得ず、亦誤れりと謂ふへし、惟ふに美術は以て其國の文物及び風俗をも徴するに足るべくして、文明と密著の關繫を有し、寔に美術の美は國家の花にして、文明を増進するに値ひ、益々此花を培養して、燦然たらしめざるへからず、此れ本校の設置ある所以にして、諸君今其業を卒り、止たに固有の美術を振興するのみならず、更に幾層々の巧妙と光彩とを致すの任に當らんとす、諸君の妙手を有し、學力を兼る、必ず帝國文明

の美花をして燦爛たる光彩を發せしむべきを信す、而して更に諸君に望むべきもの一あり、他なし、從來の模型に泥ます、斬新の意匠を出して、美術の價値を増進せしめ、以て帝國特有の美技として、世界萬國の愛賞を博するに努むべき、即ち是れなり、諸君果して能く吾人の望みに副ふあらば、此れ帝國の名譽にして、苦學の實益、是に於て乎顯はる、故に特に之を諸君に望む。

◎ 答辭

不肖等、教官各位の懇篤なる教授を受け、茲に學成り業遂げ、卒業の證書を授與せられ、多年の宿志を達するを得たり、此れ不

肖等の力にあらず、偏へに師恩の致す所にして、謝する所を知らずと雖も、而るも亦匪勉業に就き、受る所の技術を實驗活用するに怠らすんは、幸に世人の望みに副へ、師恩の萬一に報るを得ん、美術の事業甚だ多く、技術の進歩窮りなし、孜々として、之に勤むるあらば、未だ以て帝國の美花を増殖するに足らずとするも、亦豈實益なからんや、謹んで答辭す、

◎ 音樂學校卒業式の祝辭

諸君、諸君は勤學の功を積み、茲に卒業證書を授與せられ、今より進んで音樂教授の任に當らるゝは、國家教育の爲め、欣喜に堪へざる所なり、抑も音樂の教育に必要なるは言を俟たず、吾

人社會は、煩雜紛踏の熱鬧場たるに拘はらず、吾人をして心を沈め耳を澄まし、和氣雍々として、精神を爽快ならしむるものは、音樂なり、若し社會に音樂なかりせば、何を以て能く人心を和らげん、此れ古來世の文野を問はず、時の治亂を論せず、萬國皆自ら音樂の行はるゝ所以なり、然れども音樂は、五音を正たし、律呂を調へ、優美と逸雅とを保たしめ、勉めて之を高尙に導かされは、動もすれば、鄭衛の淫聲邪音に流れ易し、此れ音樂者の最も注意を要すへき所なり、帝國固有の音樂は、優美にして高尙なりと雖も、亦文明の風韻に乏しきの感なきにあらず、諸君事に音樂に従ふに當り、風韻を文明に誘ひ、律呂を進化に導

かは、我音樂をして一層優美高尙ならしむるを得へし、諸君の應さに勤むへき、此に在りて存す、冀くは諸君之を心にせよ、以て祝辭とす、

◎答辭

本日は盛大なる式典を舉げられ、生(妾)等に授けらるゝに、卒業證書を以てせらる、生等永く此の名譽を保全し、以て師恩を報謝するは、今より出て、音樂の進歩を圖り、帝國の美風を添るに在り、若し夫れ音樂を以て國家の文明を助くるは、其任重ふして敢て當らすとすするも、音樂の優美と高尙とを失はしめず、學兒の倦を慰め、朝野の心を和るに努るは、生等の負荷する責

任とし、孜孜勤勉して、任を盡すに怠るなからんとを期す、謹んで蕪言を述べ、以て敬答す、

◎陸軍士官學校卒業式の祝辭

本校生徒、茲に學業の卒るを告げ、特に式典を舉行して、卒業證書を授與す、寔に是れ卒業諸君の大譽にして、且つ帝國の優榮たり、何ぞ欣喜に堪へん、回顧すれば、我邦士官の養成に勗る既に久し、苟も學を本校に修めて、克く其業を卒る者は、將校の器才と作戰の謀略とを有し、出て、一團一隊の長と爲り、能く部下を指揮して、士官の職を辱かしめざるは、既往の成績に徴して、顯明なりと雖も、其伎倆を實地に試みたるは、一二内亂の戡

定に與かるに止り、未だ敵國と勇武を較し、唯雄を決するの機會に接せず、身國家の干城に任する者、誰か脾肉の感なからんや、偶々朝鮮事件に關して、清國と釁を啓き、是に於て乎、多年養成せられたる、士官諸君の伎倆を顯はすへきの時機に際會し、出て、清國遼東の野に戦ふや、連戦連勝、其勇武は貔貅も管ならず、此れ我軍人は舉て敵愾の勸念に強く、忠勇の節義に厚きと、天皇陛下の威徳とに由ると云ふと雖も、抑も亦士官諸君か、平生訓練の武術を顯はし、作戰其策を得、指揮其宜しきを得たるの致す所と謂はざるへからず、之を換言すれば、士官養成の實効は、此に至て顯はれたりと謂ふへし、而して帝國の兵備

は、未だ以て完全を告げたりと謂ふを得ず、帝國の軍隊は、未だ以て至強を致したりと謂ふを得ず、今より銳意奮進、以て兵備を増加し、軍隊を練習するは、國土を保護し、國威を宣揚するに於て、欠くへからざるは言を俟たず、前途益々士官の必要を感じるに際し、諸君等將に其職を充すの任に當らんとす、此れ本日此の盛典を舉行するは、諸君の大譽とし、且つ帝國の優榮とする所以なり、然れども士官の職務は重任なり、忠勇と智謀とを兼備するにあらざれば、兵學の蘊奥を究むと雖も、未だ以て干城の任を盡すに足らず、諸君か學識と勇武とを具備するは、敢て信する所にして、若し一朝事あるに遇は、能く寇敵を破

挫し、國威を宣揚するに努め、一身を國家の犠牲に供して、惜ます、奮起勇進、其職任を盡さるへしと雖も、前途帝國をして益々強國たらしむるは、一に後進士官たる諸君の責任とす、請ふ諸君之を記せよ、

◎答辭

生等本日卒業證書を授與せられ、出て、軍人社會に立つの光榮を得せしめらる、生等の欣喜、何ぞ此れに過ぎん、生等不肖と雖も、教官各位の懇篤なる訓養を受け、軍人職務の重きを解し、國家干城の責めを知るを得たり、今より任に軍事に就て、身命を惜ます、眷々訓誨を服膺し、庶幾くは以て、軍人の職を辱かし

めさらんことを期す、茲に謹んで答謝す、

◎陸軍幼年學校開業式の祝辭

諸君、諸君は、帝國士官の要素として、本校に勤學し、茲に卒業證書を授與せらる、此れ諸君が螢雪の功を積める結果にして、士人の名譽たりと雖も諸君の學業は、未だ完成を告げたるにあらず、今より進んで士官學校に入り、更に學習せざるへからず、願は諸君は、軍功顯著なる將校諸氏の子弟に係れり、須らく軍學に鍛鍊士官に就職し、以て父兄の名聲を辱かしめざるに努めざるへからず、諸君の前途は遼遠にして、其任亦重し、冀くは身體を健全にして、勤直學を勤め、他日今回の名譽に加ふる

に、更に一層大なる名譽を以てせよ、之を以て祝辭とす、

◎答辭

生等年猶幼にして學亦淺く、本日幸に卒業證書を授與せらるるの光榮を受るも、纔かに初步の學を卒るに過ぎず、謹んで高訓を服膺し、今より刻苦勉勵して、士官の學を修め、以て本校師恩の懇篤なるを謝し、併せて父兄の名聲を汚辱せざるに努むへし、謹んで答ふ、

◎教導團卒業式の祝辭

本團茲に幾何回の卒業生を出し、特に式典を舉げて、卒業證書を授與す、抑も本團は下士の養成を以て任するは、言を俟たず

と雖も、本國を代表し、卒業生諸君の爲め敢て諸君に一言せざるへからず、下士の職たる、一隊に附屬し、平時は隊卒を監して、紀律を守るに努めしめ、戦時には特務として、隊卒を指揮するとあり、其任亦輕しとすへけんや、矧んや征清の役ありしより、下士の職は、一層重きを加へたり、止たに實戦に際し、率先敵に當るの大任を負ふのみならず、斥候と爲り、軍使と爲り、又は兵站部の護衛と爲る、下士最も之に與かれり、故に下士たる者は、拔群の勇武と、應分の學識とを兼備せざるへからず、此れ下士養成の必要ある所以にして、前途兵備を擴張せらるゝに際しては、益々下士の必要を告るに至るへし、而して下士其人を得

さらん乎、士官其任を盡すと雖も、豈に一隊をして指揮に従ふ、手足の如くならしむるを得へけんや、下士其人を得て、指揮亦行はれ、一隊由て以て一齊の活動を爲さしむるを得へし、諸君今より出て、下士の職に就かんとす、敢て身を輕きに置かず、長官の命に遵ひ、以て隊卒を監し、紀律を守るに努めしめば、一隊整然として、勇武必ず増し、軍氣隨て振ひ、我兵をして文明國の強兵たるに愧ぢなかしむるを得へし、此れ敢て諸君に望む所なり、請ふ諸君之を努めよ、

● 答辭

生等本團の學則を履み、努力の功空しからずして、茲に卒業證

書を拜受す、本日の光榮は、教官の恩賜として、又軍人の名譽として、永く臆に記して忘れざるへし、而して職任の重きに至ては生等の不肖なる、學識に乏しく、恐くは之に耐へず、寧ろ慚愧に堪へずと雖も、而るも一朝難に當て、身命を顧みず、以て軍人の職分を盡すに至ては、固より心に期する所なり、庶幾くは亦其職を辱しめさらん乎、謹て奉答す、

五分間演說辭典 (終)

内務省納本濟

昭和十年八月二十日印刷
昭和十年八月廿五日發行

定價一圓

不許
複製

著作者

大阪市東淀川區木川西ノ町三ノ三三
辭書刊行會編

發行者

大阪市東淀川區木川西ノ町三ノ三三
宮本彰三

印刷者

大阪市西區阿波座上通三ノ三九
幸松一雄

大阪市東淀川區木川西之町三丁目

發行所

秀文社

振替大阪一七八八八番

357
572

終

